

明治十七年（二八八四）
絹本着色
本紙五九・五 × 八三・三



明治十七年に浜離宮内の延遠館の装飾用として製作された一連の額絵のひとつ。荒木寛畝（一八三一～一九一五）は、谷文晁系の画家荒木寛快のもとで日本画を学んだ後、川上冬崖、国沢新九郎について洋画技法も習得した異色の経歴を持つ。本図は、写実的な花鳥画を最も得意とした寛畝の技量がよくうかがえる作品である。ヤマドリは近世以前から障屏画にしばしば描かれる鳥であり、桜とヤマドリの取り合わせも名古屋城の障壁画に狩野貞信が描いた《桜花雉子図》などがある。こうした伝統的画題を用いながら、寛畝は堅実な写実的描写と洋画風の陰影表現を織り交ぜることで独自の花鳥画を完成させた。ヤマドリの羽一枚一枚の描写にまで神経が行き届き、また雌雄を囲む桜の花弁は透けるように薄く、そしてその幹は墨一色で質感や形状そして陰影までも見事に表現されている。雄鳥が左に体を向けながら逆方向へと首をひねり、その後ろで隠れるように雌鳥がうつむくという二羽の構成は、明治二十三年の第三回内国勸業博覧会へ出品され寛畝の代表作となった《孔雀之図》（当館蔵）へと通じるものである。



47 上野玉水《栗鶉》

昭和六年（一九三一）
木彫彩色
雄…高一・二・五
雌…高八・三

ウズラは万葉集の時代から歌に詠まれ、秋の野と結びついたイメージが定着し、画題としては、たわなに実る栗の穂と組み合わせた栗鶉が好まれて、繰り返し描かれてきた。本作はその伝統的な栗鶉図の木彫作品で、薄く彩色がされている。上野玉水（生没年不詳）は昭和初期に活躍した京都の木彫家で、小禽を得意とした。昭和六年に伏見区長間部忠雄より秩父宮家へ献上された品。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

鳥の楽園 — 多彩、多様な美の表現

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 68

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 黒川廣子

発行 宮内庁

平成二十七年三月二十一日発行

© 2015, The Museum of the Imperial Collections, Sanmonmaru Shozokan